

## 令和7年度入学試験問題(後期)

## 小論文2

(人文社会科学部)  
(90分)

**【注意事項】**

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験中に落丁・乱丁や印刷の不鮮明な箇所などに気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせて下さい。
3. 解答用紙1枚と下書き用紙1枚を配付していますので、確認して下さい。
4. 解答は必ず解答用紙に記入して下さい。解答用紙以外に記入したものは無効です。
5. 監督者の指示に従って、解答用紙の指定された欄に受験番号を記入して下さい。
6. 解答用紙にアルファベット、算用数字を記入する場合には、1マスに2文字ずつ入れて下さい(ただし、字数が奇数の場合は、末尾の1文字は1マスに入れて下さい)。
7. 配付された問題冊子および下書き用紙は、試験終了後、持ち帰って下さい。

以下の文章を読み、日本における高齢化の特徴を整理した上で、将来生じる社会的課題とその解決策について、あなたの考えを800字以内で述べなさい。

老いる世界はいまとは多くの点が変わるだろう。それがどんな感じなのか知りたいなら、日本に行くといい。日本は世界で最も高齢化が進んでいる国だ。一見すると、日本はこの人口動態の変化に実にうまく対処している。もちろん、日本は昔からほかにないほど社会の結束が強く、協調性が高い。家族も大事にする。この社会的な接着剤が果たす役割は非常に大きく、「若い老人」(中年後期以上の人)が「年とった老人」(超高齢の人)の面倒をみる。日本の高齢者の多くが、一般的な定年退職年齢をすぎてもずっと有給の仕事をつづける。しかし、子どもがいない町もある。学校がなくなると、町は退職者のコミュニティになるが、やがて放棄するしかなくなる。

日本の高齢化・人口減少とその対策については、膨大な研究がなされている。政府の主要機関である国立社会保障・人口問題研究所の将来推計によれば、2045年には日本の労働力の4分の1が75歳超になる。だが、そのときにはどんな種類の仕事をしているのだろうか。そして日本の生活水準はどうなるのだろうか。若い労働者は一般に高齢の労働者よりも生産性が高い。すでに日本の生産性は明らかに下がっており、労働者1人当たりの生産量はG7諸国でいちばん低い。時代遅れのビジネス慣行も労働力の高齢化と同じくらい大きな原因ではあるかもしれないが、生産性を上げるのはかなりむずかしいだろう。

日本はいま、穏やかで、秩序が保たれ、清潔で、犯罪が少ない。市民の多くは快適な生活を送っている。それでも1980年代のようにイノベーションをつぎつぎに生み出した社会ではなくなっており、かつてのダイナミズムを取り戻すことはまずない。日本では1990年代はじめから2010年まで経済はほとんど成長しておらず、「失われた20年」と言われている。しかし、経済の停滞は20年では終わらず、この先も長くつづくだろう。

それは問題になるだろうか。高齢者に対する労働力人口の比率が現在の水準で安定するなら、たぶんちがう。だが、この比率は年々下がりつづけており、2045年には7人の高齢者をわずか10人の労働者で支える計算になる。外国から大規模な人口流入があれば状況は変わるかもしれないが、日本人はそれを拒否しているようだ。和を

尊ぶ日本の伝統的な精神のおかげでいまはなんとかなっているが、この先どうなるかはまったくわからない。

結局はこういうことである。少子高齢化が進んで生活水準が下がること、おそらく自分の親よりも下がることを若い人たちが受け入れる覚悟ができているのであれば、高齢化社会は円滑に機能できるはずだ。いちばん深刻な状況なのは日本だが、最大限の対策もとられているのではないか。しかし、ヨーロッパはどうだろう。

ヨーロッパは日本の後を追って同じような形で高齢化しつつある。南ヨーロッパは北ヨーロッパよりも出生率が低く、東ヨーロッパはさらに低い。南ヨーロッパ、東ヨーロッパとも、若者が国外に流出しており、北と西に移住している。ヨーロッパはつぎの日本だと言われているが、決してよい意味ではない。だが、ヨーロッパ諸国は二つの重要な点で日本とはちがう。ヨーロッパは社会が断片化されていること、そして人口の流入と流出が多いことだ。そのため、ヨーロッパには日本に似ているところ、少なくとも高齢化のパターンが似ているところもあれば、アメリカに似ているところもあり、抱えている課題はそれぞれ異なると考えるほうがいいだろう。

(ヘイミシュ・マクレイ著、遠藤真美訳

『2050年の世界——見えない未来の考え方』日本経済新聞出版、

引用に際して必要な修正を加えている。)